

水中淡水浴によるクエの目に寄生するハダムシ類の駆虫

○石橋將行，久志本鉄平，園山貴之
(下関市立しものせき水族館)

クエ *Epinephelus moara* はスズキ目ハタ科に属し，成長すると体長約 1.2m に達する大型魚である．飼育下では，ハダムシ類が寄生することが多く，各鰭や頭部周辺，特に目の表面に多い．当館で飼育中の成魚では，寄生されても摂餌等には影響が少ないが，目に白濁がみられ，悪化すると角膜炎から新生血管形成を引き起こす可能性が生じる．しかしながら大型であることから取り上げが困難で，展示水槽も大型であることからスタッフ及び個体に負担をかけない安全な駆虫方法を模索してきた．

一方，本種を飼育展示する関門海峡水槽（水量約 300 m³）では解説イベントを行っており，ダイバーが出すエアールに対し自発的に接近し，開口及び鰓を広げ，その場に留まる行動が多く認められていた．そこで，その行動を利用して水中でエアールを用いて留ませた個体に，ホースで淡水を直接目にあてる方法を試みたところ，駆虫に成功したためその方法を紹介する．

駆虫には，容量約 20ℓ のポリ袋に約 60cm のホースを繋ぎ，その先に漏斗をつけたものを用いた．トレーニングとしては，エアールに集まっている個体に対する接触刺激や道具への脱感作から始めた．まず，エアールを口や鰓孔に当てながら手袋を着用した手で体，目と触れていき，30 秒を目標に徐々に維持時間を長くした．嫌がって離れて行く行動もみられたが 2 週間程度すると接触刺激に反応しなくなったため，次に手で目を覆い，見えないことに慣れさせた．これを 1 週間行い，その後手を漏斗に変更した．淡水浴の実施は，ポリ袋内に淡水を満たし，ダイバーの脇に挟み圧力をかけることで漏斗より排出した．

駆虫には約 1 分間を要したが，その間エアールを出し続けることによってその場を離れていくことは無かった．淡水浴後には目に寄生していたハダムシ類の体色の白濁が認められ，翌日に確認したところ，寄生はみられなかった．その後再度寄生がみられたが，約 1 週間に 1 度のペースで淡水浴を実施すれば寄生の少ない状態が維持できることがわかった．